

Title	建設業の競争戦略に関する一考察
Sub Title	
Author	太鼓地敏夫(Taikoji, Toshio) 青井倫一
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1991
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1991年度経営学 第851号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001991-0851

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名	太鼓地敏夫 (鹿島建設株式会社)	主査 青井 倫一 副査 藤枝 省人 柳原 一夫
所属	青井 倫一 研究室	

建設業の競争戦略に関する一考察

本研究は、従来、定量的・実証的な分析が欠けていた第2次石油ショック以降の国内建設市場における大手建設業者（通称大手ゼネコン）の競争構造の変化を解明し、今後の競争戦略について提言を行ったものである。

具体的には、まず、大手ゼネコンの従業員一人当たり売上高の大幅な伸びの原因について検討し、大手ゼネコンが企画・設計・エンジニアリングなど川上業務の強化と下請けの強化・育成による施工の外注化、すなわちCM（Construction Management）的機能へシフトしつつあるということを示した。

次に、建設業界の競争構造に関してM. E. Porterにより提案されたフレーム・ワークによる分析を行った。その結果、大手ゼネコンはCM的機能へのシフトすることにより、そのシェアを増加させ得るという仮説が導かれた。

そこで、大手ゼネコンの売上高成長率と工事原価に占める外注費比率の変動およびR&D費の増加に着目し、その相関関係を分析することにより仮説の実証的な検討を行った。

その結果、民間建築分野に関してのみ仮説は支持され、大手が準大手のシェアを奪うという寡占化への競争構造の変化が生じていること、およびその成長率はCM的機能へのシフトの度合いによって格差が広がっていることが考察された。

以上の検討結果に基づき、今後の競争戦略について以下の提言を行った。

「大手は、民間建築分野において今後ともCM的機能へのシフト戦略を継続することは妥当と思われる。ただし、川上業務の強化と施工外注化をバランスよく進める必要がある。しかも、この戦略は先行した企業が著しく優位になる（First Moover Advantage）可能性を秘めており、いかに他社に先んじるかが競争優位を築く上で重要となる。」